2026年11月1日（日）主日朝礼拝説教

『腰の曲がった女』　井上隆晶牧師
箴言3章21～35節、ルカによる福音書13章6～13節

❶【実を結ばないいちじくの木】

今日は「実を結ばないいちじくの木」と「腰の曲がった女」のお話しをします。イエス様はある時は「言葉」をもって、またある時は「行動」によって神様の愛と人間の正しい生き方について教えられました。旧約聖書では、神の教えは「十戒」という石に書かれた文字の形で伝えられましたが、それはごく一部でした。すべてを書ききれないからです。そこで十戒を与えたお方、その本体が肉体を取って現れました。それがイエス様なのです。だから**イエス様が語ったこと、イエス様が行ったことのすべてが新しい十戒だと思ってください。イエス様が語ったことで分からない時は、イエス様がなされたことで学ぶのです。皆さんでも、言葉で教えられて分からなくても、行動や体験で教えたら分かるでしょう。**

さて最初の譬えです。「**ある人がぶどう園にいちじくの木を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。**」（ルカ　12：6）ある人とは神様であり、いちじくの木とは私たち人間のことです。神様は三年の間、毎年、実を探しに来られましたが見つけられませんでした。三年というのは「毎年」という意味だと思ってください。実とはその人の品性であり、聖書では「**愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制、信仰**」（ガラテヤ5：22）と書かれています。ひと言でいうなら神様に似た者になることです。人間は神様に造られた良いものなのに、その良い状態を保つことができず、罪によって歪み、悪魔に似た者となってしまいました。時代が経つにつれて、罪は雪だるま式に増加し、犯罪はどんどん低年齢化し、ますます人間性は悪くなっているように感じます。
そこで園丁を呼んで言います。「**切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか**」（12：7）園丁は答えます。「**御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。**」（12：8～9）この園丁とは、キリストであり、あなたを愛し、あなたの世話をしてくれた人たちです。**肥やしとは彼らの愛であり、犠牲であり、忍耐です。**旧約聖書の中で、イスラエルの悪があまりにもひどいので、神様はイスラエルを滅ぼすと宣言する箇所があるのですが、すぐその後で「**ああ、…お前を見捨てることができようか。…私は激しく心を動かされ、憐みに胸が焼かれる。…私は神であって人間ではない。お前たちのうちにあって聖なる者。怒りをもって臨みはしない。**」（ホセア11：8～9）と言われるのです。悪は裁かねばならないが、可哀そうで自分にはできないというのです。

●この箇所について榎本保郎牧師はこう書いています。「愛とは多くの矛盾を含む行為である。…善人を愛し、悪人を憎むところには痛みはない。しかし悪人を善人と同じように愛するためには、その悪人の負債を自らが負わなければならない。愛とはそれをなさしめる力である。」この神の愛が十字架という形で現れたのです。神様は人間を撃つのではなく、自らの子を撃ったと言うのです。

皆さん、注意してこのたとえ話を聴きましょう。もしこの園丁の祈りと犠牲がなかったならば、いちじくの木はその日の内に切り倒されていたのです。今日、あなたが立っているのは自分の力や立派さの故ですか？そうではなく、あなたのために祈っているキリストや多くの人がいるからなのです。高ぶってはなりません。あなたは切り倒される木でした。自分のために祈っている人がいることを忘れてはなりません。あなたのために献げられた犠牲を忘れてはなりません。

❷【腰の曲がった女】

つぎに腰の曲がった女の人の話です。18 年間、病の霊に取りつかれて腰の曲がったまま、どうしても伸ばすことができない女の人がいました。イエス様はその女性を近くに呼び寄せ「**婦人よ、病気は治った**」（ルカ 13：12）と言って、その上に手を置かれると、たちまち腰がまっすぐになって癒され、彼女は神様を賛美しました。聖書はギリシャ語で書かれているのですが「**体を伸ばす**」というギリシャ語には「**上を見る**」という意味もあります。ラテン語訳（ウルガタ訳）の聖書では「上を見る」と訳しています。腰が曲がった人はいつも下を見て歩き、上を見上げることが出来ません。つまりこの女の人は、地上のものに心が奪われ、天上のもの、神と神の国を求めることができなくなった罪人を象徴しているのです。人は本当に価値あるものが分からなくなり、永遠に残るものではない、朽ちる物を必死にかき集めているのです。人は天上の光を見るために創造されたのです。地上の闇をさまようために創造されたのではないのです。

❸【実を結ぶためにはどうするか】

では実を結ぶにはどうしたら良いでしょう。朝の祈りの時に、旧約聖書のホセア書の中に興味深い話が出て来ました。主はこう言われます。「**イスラエルは伸びほうだいのぶどうの木。実もそれに等しい。実を結ぶにつれて、祭壇を増し、国が豊かになるにつれて、聖なる柱を飾り立てた。彼らの偽る心は、今や罰せられる。**」（ホセア 10：1～2）新約聖書でイエス様は「**わたしはぶどうの木、わたしの父は農夫である。…実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。**」（ヨハネ 15：1～2）と言われました。農夫である神様は、ぶどうの木の手入れをなさいます。ぶどうの木はまず、要る枝と要らない枝をより分け、要らない枝は切り取ります。**さらに残した枝も、たくさんの芽が出ても、二つだけを残して、その先から全部切ってしまいます。そうしないと良い実を結ぶことができ**

ないからです。ところがイスラエルは伸びほうだいのぶどうの木だったといいます。そうなると病気になり、栄養が分散されてしまうので食べられないまずい実がなるのです。イスラエルは国が豊かになると、ますます貪欲になり、この世の楽しみを求めて何にでも手を伸ばし、偶像に走りました。何にでも手を出しては駄目なのです。**人生の時間は限られています。あれもこれもしてはいけません。本当に必要なことと、どうでも良いことを判別しなければなりません。そして本当に必要なことに時間と命を使わなければならないのです。あれもこれも手を出した人は、すべてが中途半端になり、天上の実が結ばないでしょう。**

●榎本保郎牧師の本の中にある一人の女性の方の話が出て来ます。
「一人の姉妹があるとき私をたずねてきた。彼女は嫁ぎ先の人たちの冷たい態度に耐えかねて、子供を道連れに無理心中をはかった。ところが子供は死んで自分は助かった。彼女はこのことによって以前に増して生き難くなった。家を出た彼女は死地をさがしてさまよい歩いた。そしてこの日、ふと教会に来たのである。私は彼女の身の上話を聞き、驚いた。…彼女はとまどう私に向かって『これからどうすればよいか』と聞く。途方に暮れた私は『教会に来て、神様を信じなさい』と答えた。こうは言ったものの、恥ずかしながら私には全然自信がなかった。まったく不信仰な牧師である。しかし彼女は教会につどうようになった。幾月かたったとき、彼女は牧師館に走り込んできた。長い間何一つ連絡もなかったご主人が彼女のアパートに訪ねて来てくれたというのである。彼女はやっとこれだけを告げて大声を上げて泣き出した。うれしかったのである。このことによって家人の心はますます固くなり、何とかして赦して貰おうとの懸命の努力も無駄であった。『人殺しを家に入れることはできない』と言って冷たく拒絶されるだけであった。しかし彼女はどんな屈辱を受けても、受け入れられる日を願い求めた。それは十数年間続いた。そして最近、ようやく姑が訪ねてきてくれたとのことである。彼女はその喜びを私に伝えて来た。その手紙には涙の後があちこちにあった。」

人は自分の力では良い実を結べません。この世の成功、繁盛、経済的な豊かさというこの世的な実は結ぶかもしれませんが、そのような実は天国に持ってゆくことはできません。神の実を結ぶには神につながらなければなりません。だからイエス様は「**わたしはぶどうの木、…あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。**」（ヨハネ 15：4）と言われたのです。この子供が死んだ女性は、牧師の勧めを素直に受け入れました。**他の様々な方法で問題を解決しようとするのではなく、神様に従ってみようと決心したのです。そこで神様は彼女に和解という豊かな実を結ばせてくれたのです。**この事例を聞いて、私たちも勇気を出しましょう。恵みを無駄にせず、時間があるうちに神に向かってしっかり立ち、神に手を伸ばしなさい。そして神の言葉をまず第一にし、それに従いましょう。神は必ず良い実を結ばせてくださるでしょう。